

Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.97

2008年10月29日

〈URL〉 <http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/>

〈E-mail〉 peshawar@kqh.biglobe.ne.jp



表紙絵 佇む驢馬 (画・甲斐大策)

「緑の楽園」、実現への最終工区へ	中村 哲
平和こそ追悼、事業の継続を誓います	中村 哲
荒廃した農村への深く温かいまなざし	高橋 修
現地は伊藤さんの成果が実る季節です	山口敦史
悔恨の念に捕われながら、日本に帰ってきました	松永貴明
それぞれの良心を共有し、現地活動の平穏を祈る	進藤陽一郎

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

「緑の楽園」、実現への最終工区へ

— 故・伊藤和也氏と農業計画の成果が沙漠を緑に

ペシャワール会現地代表・PMS（ペシャワール会医療サービス）病院総院長 中村 哲

日本人は撤退、用水路は二十キロを通過

みなさん、お元気でしようか。

去る八月二十六日の凶弾に倒れた伊藤和也さんの事件以来、ずいぶんと心配された方も多いかと思いますが。また、秋に予定されていた報告会が各地で中止となりましたこと、主催者と会員の方々に深くお詫び申し上げます。九月中にアフガニスタンに留まっていたワーカーが全員帰国し、十月にはパキスタン・ペシャワールからも全て居なくなります。これは、〇七年度報告（会報九六号）で述べた通りで、年内の日本人ワーカー一時引上げの時期が早まったからです。理由は伊藤さんの事件だけでなく、八月以降、予想以上に悪化する治安を考慮してのことでした。

といっても、ペシャワールの基地病院を除けば、事業が停滞している訳ではありません。

用水路は最後の難関である二十キロメートル地点を通過し、同地点から延ばされた分水路によって、これまで水の届かなかつた乾燥地帯、千数百ヘクタールが間もなく潤されます。故・伊藤和也君がかかわっていた試験農場は、十一月に一区切りをつけ、その成果を元に、新たに開墾される広大な農地で大々的に活かされることとなります。医療面では、ペシャワールとその周辺がアフガン以上に危険になったので、しばらく病院の規模縮小が行われます。当面は、ハンセン病患者の診療拠点をアフガン側のジャララバードに移さざるを得ないかも知れません。しかし、これも年度計画で述べた通りで、みなさんご理解を賜りたいと存じます。

伝えられないアフガンの死

「医療団体」が診療規模を縮小してまで、な



用水路の最終Q工区に建設中の水門

ぜ水利事業と農業振興に心血を注いでいるのか、不可解に思われることがしばしばありますが、日本では理解し難いかもしれませんが、清潔な飲料水と十分な食糧さえあれば、多くの命を救えるからです。アフガンでは児童の死亡原因の大部分が栄養失調、赤痢などの下痢症で、要するに水がないからです。かつて豊かだった農村地帯は沙漠化で見る影もありません。

病気だけではありません。パキスタンの難民三百万人、アフガン国内で百万人以上と云われる国内避難民は、殆どが農村地帯で生活できなくなった人々です。これに戦争という

人災が加えられます。日本では、外国兵の死亡はよく伝えられますが、罪のないアフガン人の、「誤爆」による犠牲は偶にしか伝えられません。一人の外国兵の死の背景には、百を倍するアフガン人の殺戮があることに、思いを致すべきかと思えます。日本からアフガン情勢をめぐる論評をよく耳にします。しかし、現地に居る小生から言わせれば、殆ど空虚に響きます。「自分の国もまともに治められないのに、国際貢献だのと天下国家の議論はもうよい。空爆下のアフガン人の命はどうなるのか」と言いたい所です。ましてや、伊藤くんの死を「反テロ戦争」などという政治の具に使う発言を聞けば憤死の思いです。暴力は暴力によって倒されるという鉄則を信じ、今は沈黙したく、人命の尊重には実事業の完遂を以て応えたいと思えます。

小麦価格はうなぎ上り

アフガン東部は、今パキスタンから送還された難民であふれています。着の身着のまま沙漠に放り出されたような集団を、あちこちで見かけます。訊けば、パキスタンだけでなく、アフガン国内の避難民も膨大です。

問題は絶対的な食糧欠乏です。小麦価格はうなぎ上り、パキスタン国内だけでも、パンジャブ州で小麦二〇キログラムが四〇〇ルピー、ベシヤワールで八〇〇ルピーと約二倍、

さらにアフガンのジャララバードでは三倍の一二〇〇ルピーです。間もなく冬が到来します。働く術もなく沙漠に放り出されている人々、戦争で村を追いつかれた人々、彼らはどうやって生き延びたらよいのでしょうか。本当は戦争どころではないのです。

「危険情報」や「危機管理」という言葉は、現地の人々にはありません。逃げるというよりも逃げる所がないのです。「窮鼠猫をかむ」と言います。もう追いつめられた人々が我慢している時期は過ぎました。最近では女性や子供による「自爆テロ」までが、急増しているそうです。大抵は外国軍の空爆で肉親を失った家族で、復讐社会では当然考えられることです。子供を爆撃で失った親の気持ち、バラバラに飛散した親の死体を集める子供の心情を思い浮かべてください。米軍に擁立されたカルザイ大統領でさえ、「これ以上アフガン人市民を犠牲にするな」と激しく外国軍を非難したそうです。「〇〇村の空爆で市民が〇〇名死んだ」とか、「隣のパキスタンで〇〇村が戦闘状態に入った」とか、「無人機がテロリストの居る村を攻撃して〇〇名の婦女子が死んだ」とか、このところ連日、やり切れぬニュースばかりです。

最終地点ガンベリー沙漠の測量を完了

ともあれ、暗ければこそ明かりを灯す価値

があります。このような事情の中でこそ、アフガン東部の限られた地域ではありますが、私たちは言葉ではなく、実のある行為と実績を以て、平和の何たるかを実証するであります。理念や信念の問題ではありません。目前で展開する事態に対し、いかに人間らしくかわるかの問題であります。

わがジャパン用水路では、このところ帰農する旧難民が増え、緑が勢いよく広がっています。作業現場では毎日、五〇〇名を超える農民たちが必死で働いています。最終目標地点である、ガンベリー沙漠の横断測量を完了し、ルートが決まりました。その幅約三キロメートル、熱砂に煽られ、容赦なく照りつける陽光、限りなく広がる沙漠、茶褐色の山肌と紺碧の空、その彼方に蜃気楼のように緑の楽園を想像するのも嬉しいことです。日本人ワーカーが全て去り、多少寂しいですが、「少なくとも、ここには希望がある」という確信、いや確信というよりは喜びが、小生の役得であります。皆が去った分だけ忙しくなったものの、オンボロ重機の唸り、シャベルをふるって汗を流す人々の気迫、威勢のよい喧嘩まで、何やら頼もしさを覚えるこの頃であります。

日本にあって平和を願う人々と祈りをあわせ、志半ばに逝った伊藤くんの分まで、存分に力を尽くしたいと思えます。

平和こそ追悼、事業の継続を誓います

— 現地追悼集会での弔辞 —

ベシャワール会現地代表 中村 哲

まず、ダラエヌール、シェイワ、シギの全ての人々が伊藤くんの捜索活動や遺体搬送に協力し、そして今日、こうして多くの方々が哀悼の意を表して下さることに、心からの感謝を申し上げます。

伊藤くんの遺徳については、多くの方々が様々に生前のことを述べられたので、私がくどくどと申すことは無用かと存じます。ダラエヌールの小さな子供やご婦人方に至るまで、悲しみを表し、私たちPMSへの同情と感謝を改めていただいたことは、悲しみの中にあつても、光栄という他、ありません。

伊藤くんを殺したのはアフガン人ではありません。人間ではありません。今やアフガンニスタンを蝕む暴力であります。政治的なものであれ、物取り強盗であれ、心ない暴力によって彼は殺されました。

不幸にして世の中には、伊藤くんの死を政

治目的に利用しようとする者もいます。また、

アフガニスタンという国の文化を知らず、PMSと皆さんとの交誼を知らず、様々な噂や論評が横行いたします。その中には聞くに堪えない無理解、戦争肯定が少なからずあります。そうして生まれる武力干渉が、現在のアフガニスタンの混乱を招いてきました。このことを否定する者は、今日集まれた方々の中には居ないと思います。私たちはもう、戦争に疲れました。

私たちPMSは、極力アフガンの文化を尊重し、アフガン人がアフガンのふるさとで、アフガンのやり方で生活ができるように、平和なやり方で、事業を進めてきました。繰り返しますが、「平和に」です。戦争と暴力主義は、無知と臆病から生まれ、解決にはなりません。

いったい、イスラム教徒であることが罪悪でしょうか。アフガン人が自らの掟に従って

生きることで悪いことでしょうか。私はキリスト教徒であります。しかし、だからとして、ただの一度としてアフガン人から偏見を持たれたことはありません。良い事は誰にとっても良いことで、悪い事は誰にとっても悪い事でもあります。現に、このようにして全てのクズクナルの人々が集い、異教徒である伊藤くんの死を悼んでいるではありませんか。心ない者はどこにも居ます。今回の事件でアフガン人と日本人との間に亀裂があつてはなりません。

アフガン人も日本人も、親として、人としての悲しみに、国境はありません。命の尊さに国境はありません。「困ったときの友こそ、真の友だ」といいます。今アフガニスタンは史上最悪のときを経ようとしてつありまます。五百万人以上の人々が飢餓に直面し、無用な戦争で多くの罪のない人々が命を落としています。

かつて六十年前、日本もまた、戦争で、国土が廃墟となりました。二百万の兵士と、百万人の市民が死に、アジアの近隣諸国にはそれ以上の惨禍をもたらしました。私も、生まれた直後の様子を良く覚えております。外国人はいつでも逃げることができません。しかし、この廃墟と化した土地にしがみついて生きなければならぬアフガン人は、どこにも逃げ場所がありません。



↑↓伊藤さんの記念碑は、9月13日、ダラエヌールのブディアライ村の一角に中村医師の手で建立され、四方には桑の木が植樹されました。



であればこそ、私たちPMSは、変わらずに事業を継続して、皆さんと苦楽を共に致したいと思えます。それがまた、伊藤くんへの追悼であり、過去の戦争で死んだ人々の鎮魂であります。皆さんの協力と要望がある限り、PMSの活動を止むことなく継続することを



誓い、弔辞と致します。

二〇〇八年九月九日

アフガニスタン・シェイワにて
ペシャワール会現地代表・中村哲



(葬儀は、現地時間午前九時からシェイワに建設中のマドラッサ敷地内に約八〇〇人が集まり開かれ、各村の有力者らが弔辞を読み上げ、祈りを捧げました。村人との結束はより深くなりました)

9月9日の現地葬儀の様子には地元農民や郡長ら800名が参列。各村の代表が弔辞を述べ、中村医師の弔辞もこの場で読み上げられました。

荒廃した農村への 深く温かいまなざし

伊藤君から送られた写真に思う

PMS農業指導員 高橋 修

今私の前には、伊藤君から送られてきた一葉の写真がある。万感の思いで倦くことなく眺めている。伊藤君からの写真は残念ながらこれが最後になってしまった。

写真にはかなり立派なブドウを持った少女二人が前列に立ち、後ろに少年一人が控えている。三人とも僅かに微笑んでいるがどことなくバツが悪そうだ。写真には「盗ったど〜」と題名がつけられ、撮影期日は二〇〇八年六月十六日とある。

少女が持っているブドウは、間違いなくブダイアライの試験農場の生産物であろう。少女達が畑から失敬してきたところへ圃場の見回りに来た伊藤君が出くわし、怒るのを忘れてシャッターを押した構図と映る。

アフガンでブドウの試験栽培を始めた狙いは、将来、近くの市場で売って現金収入を得ることが主目的であった。副次的に荒廃した農村に少しでも潤いをもたらすことができなしかと考えたためである。ところがそうは簡

単に問屋が卸さなかった。その模様は伊藤君がベシャワール会報九六号にリアルなタッチで寄稿しているので紹介する。

〈幻のブドウ・ついに収穫へ〉

ブドウはこれまで毎年、実る寸前になるとことごとく近隣の子供達に盗み食いされ、悔しい思いをしながら肝心の食味が分からない幻のブドウの世話を続けてきました。昨年は心を鬼にして子供達を追い散らしましたが、やはり盗み食いが止まらないので本当の鬼になってやろうかというところまできました。今年はいよいよにたわわに実った子実を収穫できる見込みとなりましたので一転気が和み、我々もアツラーの神ならぬ仏の心になりました。この会報が皆様の手に届いている頃には、きっと念願のブドウを「美味しい〜」と農家達と一緒に味わっているはずであります。

まだ彼の記録が続く。〇八年六月二十日、七月三日の農業計画近況報告に「近所の子供に『ブドウが熟したら食わせてやるから熟すまで食うな』と厳命していた約束もあって、まず近所の子供や大人に配ったため、藤田さんへは残念ながら送ることができませんでした」と書かれている。この報告の半月前、私から「ブドウの苗木を導入する際、藤田さん



「盗ったど〜」(故・伊藤和也氏撮影)

に大変お世話になったのでブドウが収穫できたら届けてくれないか」と連絡したことに對する返事である。

再び写真に戻ろう。少女達のバツの悪そうな顔はイトー兄ちゃんと交わした約束を破ったことに対するテレ隠しであろう。普通の人間なら泥棒という行為と約束を破ったことに対して怒るはずだ。ところが伊藤君は怒る前にカメラを向けてシャッターを切っている。少女達もまた逃げもせず、半ば見せびらかすようなポーズをとっている。ここに伊藤君の優しさや伊藤君と少女達との関係が鮮やかに映し出されている。

もちろん伊藤君はブドウを導入した目的は

知っている。彼は、そのことも大事だが、まず索漠さくぼくとした農村に潤いをもたらすことがもっと大事だ、子供の温かい心を育てることが将来のためにより重要だと語りかけているように感じられる。彼の人間性、優しさがにじみ出ており、私よりもはるかに長いスパンで農業計画を考えていたのではないかと思えてならない。

○ワーカー通信

現地は伊藤さんの 成果が実る季節です

灌漑用水路建設担当 山口敦史

頓挫のモスク建設を救った伊藤さん

新月を迎えようとするダラエヌールの夜空にはいつもにまして星が輝いている。いつの間にか朝冷えるようになり、温かいチャイに体を癒される。チャイをいたたくや否やまだまだ眠気の抜けない体を車まで運び五時にダラエヌール診療所から試験圃場けんけんぼのあるカラ

私が農業計画を担当してから六年半、伊藤君が農業計画に参加して四年近く、私のライフワークである農業普及の集大成の場として、一緒に現地で仕事をし、また二週間毎に報告を受け、その都度報告に対する回答を練り返してきた。六月十六日に撮影された写真を最後に、また八月十八日に受け取った報告を最後として現地からの情報は途絶えた。無念と

イシャヒ、ブデアライを目指す。その車には運転手として口が達者なマフマドジャン、そしてその横に無口な伊藤さん、そして運転手の後ろの後部座席に僕が座る。五分も絶たないうちにカライシャヒ試験圃場に到着する。

その日は八時から僕が車を使うことになっていたので、伊藤さんに「車をお願いします。では、またお元気で」とお互いの安全といい仕事ができる一日を送れることを確かめた。伊藤さんはいと「ハイ」と言ってくればいいほうで、いつもはウンと頷ぐだけだ。いつも通りに頷かれてカライシャヒを後にされた。試験圃場の前に降ろされた僕は、モスクでお祈りを終えた子どもたち二、三と握手する。圃場の対面にある祈りと憩いと教育の場を提供するモスクは、ある物語を帯び

いう他はない。
今なお私は虚脱状態から立ち直ることができない。ただ一つ確信を持って言えることは、伊藤君の農業計画についての意図は、多くの農家によって引き継がれ、子供達の心の中に育ち続けて行くであろうことだ。そして伊藤君が天空から静かに見守ってくれていることを……。

ている。それは、モスクの建設には基本、住民の寄付のみによって行われるが、寄付は思うように集まらず中途半端な状態で放置されていた。実は、アフガンでは未完成のまま何



サツマイモの収穫に立ち会う伊藤さん

年も過ごしているモスクはよく見かけたりする。伊藤さんはダラエヌールに住む一人の住民としてカイシヤヒとブディアライのモスクに多額の寄付を行いカイシヤヒのモスクが見事に完成した。そのお金を貯めるために、伊藤さんが身を粉にして汗を流された時間には、頭が下がる。

酷暑の中の山狩り

僕は当日、お茶栽培を行っている近くの篤農家の圃場での手入れの作業があったため出かけて作業を行っていた。足かけ五年、今年ようやく新茶の精製に成功、ほぼアフガンでのお茶栽培技術に見通しがつき始め、近隣農家も参加しての普及活動が始まったところだった。

朝七時くらいだろうか、もの凄いい見たこともないような剣幕で診療所の門番が走りながら僕に何かを叫んだ。あまりにも興奮しているようで、理解に苦しんだが、伊藤さんが連れ去られたという。とんでもない事件が起こったようだ。とりあえず、仕事は現地の作業員に任せ担当農家スタッフとともに診療所に引き返した。

診療所付近にも近隣住民が集まっており、異様な雰囲気包まれていた。僕は、診療所から外には出るなという指示があったため、ただ伊藤さんと運転手の無事を祈るしかなか

った。もうすでに、事件のあった村と隣村はモスクからの呼びかけで男たちは山狩りに出かけたようだ。そして、待機を命じられている僕とスタッフは、各々一刻も早い解放を願いながら、現場のものと連絡をとりあった。犯人を追いかけている村人と連絡がつか息の荒れた死にそうな声が返ってくる。「まだまだ先において、山道を登っている。水もないし……」。本当に追いかけているものも辛そうだった。僕たちは、何もできないもどかしさを感じながらただ祈るだけだ。

この一報を聞いて何よりも心配だったのは、伊藤さんの体だった。実は一週間ほど前から風邪をこじらされていた。しかも当日は炎天下。朝は冷えるものの十時を過ぎた頃には三十度を超す夏日となっていた。さらに、もともと腰の悪い伊藤さんには本当に拷問のようにしか思えなかった。伊藤さんと代われるのならと思いつながら、このときから伊藤さんの解放まで断食をすることにした。

「どうして伊藤なんだ」

前日も大変疲れていたようで、僕を迎えに来るのを忘れ宿舎に帰ってしまったていたのだ。本当にここ最近、ずぶ濡れでへとへとになりながら帰ってくる日が多かった。その分何か充足感にあふれた表情だったが。

特に伊藤さんが手がけていた農業用井戸か



灌漑水路の取水口で（前列右から2人目が伊藤さん）

ら水が出たときは大変嬉しそうで、伊藤さんのおごりで一緒に働いた村人に御馳走を振舞っておられた。伊藤さんからの一方的なお祝いではなく、次の日は村人が伊藤さんを御馳走に招待されていた。この間の伊藤さんの背中を見ていると水や村人に対する想い、そしてがっちり結ばれた農民との信頼関係を感じる事ができた。

夕方五時にこのダラエヌールを去るまでの間、入れ替わり立ち替わりにやってくる住民からの、伊藤さんやペシャワール会への思いを聞くことができた。

「どうして伊藤なんだ。あれだけ我々の兄弟

として、われわれのために仕事をしているのに、本当に犯人が憎い」「今の問題は、アメリカとアフガンのもめごとなのに、どうして何も関係ない伊藤が」「何年間アフガンでペシャワール会は仕事をしてるんだ？ 他の団体は何かあるとすぐに帰ってしまうけど、ペシャワール会はどうなことがあってもわれわれとともに運命をともにしていた兄弟じゃないか……」。きつともうすぐ解放されるから心配するなと見送られながらダラエヌールを後にした。

次の日は日の出とともに、ダラエヌール一帯で山狩りが開始されたようだ。僕の知って

悔恨の念に捕われながら、 日本に帰ってきました

灌漑用水路建設担当 松永貴明

いつも通りの朝

あの日はいつも通り朝五時過ぎにジャララバードを出発しました。引越しの真っ最中だった水路現場基地の事務機能を前日に旧シ

いる友人の農民はほとんど山に行くご連絡が入ってきた。

事件後も、作物はすくすく育っていく。だから、一日も休まずに農作業は進められていった。計報を知ったあと初めて両圃場の担当農家に電話をするとき、何を喋ったらいかわからなかった。しかし、彼らは自分の身をおいて、「大丈夫か、山口。何かあったら何でも俺に言ってくれ」と本当に声を震わせながら気を使ってくれる。彼らのあまりの気丈さが僕には辛く悲しかった。家族全員で断食をしたという声も聞こえてきた。

それからというもの、一通り仕事の話をし

エイワ地区から新しいシギ地区に移したので、私は新現場基地に出勤しました。ただ、旧現場基地にはいくつかの水路用資材と伊藤さんが担当していたブディアライの灌漑井戸と涸れ川の護岸の資材類が残っていました。伊藤さんは毎朝旧現場基地に来て、資材をブディアライの現場まで運んでいました。前日までは私も旧現場基地に出勤していたので、毎朝伊藤さんと顔を合わせ、資材関係のことで打ち合わせをしていました。

その日の六時十五分か二十分頃だったと思います。伊藤さんから電話がありました。

「松永さん、今日こっち（旧現場基地）に来ないんですよ」

た後、彼らは毎日こういうのだ。

「いつ帰ってくるんだ。もう大丈夫だ。早くこい。本当に。子どもたちも寂しがっているぞ」

「うん、また帰るね。それまでしっかりと作物を見といてな」

きつと今頃は、伊藤さんや住民が丹精こめて育てたサツマイモをはじめ、秋の実りが村人たちにもたらされたころだろう。そしてやってくる冬に向けて、伊藤さんの想いは長年かかってようやく普及まで漕ぎつけた燕麦などの新しい命に繋がれ大地に芽吹いていることと思います。

「はい、もう事務機能は移したんで基本こっち（新現場基地）です。もし、必要なものがあれば、そっちにアブドゥル・アハッドを送ってますんで、彼に言っておいて行ってください」

といった会話をしたのを覚えてます。その後にも多少雑談をしたと思います。最後に伊藤さんが

「じゃあ、何かあったらまた電話しますね」と言ってお話を切りました。

六時四十分頃、新現場基地で資材のチェックをしていたところ、一緒にいた基地責任者のパチャ・グルに電話がかかってきました。なにか険しい声で話をしているので近づいて



いつも黙々と任務をこなした伊藤さん

しばらく鳴りましたが、誰も出ませんでした。伊藤さんが出るのを信じ待ちましたが、数十秒後に通話ボタンが押され、すぐ切れました。その後もすぐ電話をかけたのですが、繋がりませんでした。

パチャ・グルが警察のあるシェイワ郡行政事務所に行くと言うので、何としてでも伊藤さんの安否を確認するように言って、すぐに向かわせました。私はすぐにジャララバード事務所のヌール・ザマーンに連絡を取り、緊急事態が起きたこと、詳しく

いことはパチャ・グルに電話して聞いて対処するようにと伝えました。

いくと、電話を切り、「ミスター・イトーが小銃を持った奴らに連れ去られた」と言いました。正直驚きましたが、情報が正確かどうか確認するために誰からの電話だったのか訊ねると、水路事業の現場監督でブダイアライ出身のヤル・モハマドからだと言う。しかし、ヤル・モハマドはその時水路現場の先端でブダイアライからは六、七キロメートル離れた場所で仕事をしていて、ブダイアライにはいないはずだからおかしいではないかと言うと、彼の甥が目撃して彼に連絡してきたとのことでした。

パチャ・グルが伊藤さんに電話をかけてみるというので、すぐかけました。コール音が

それから私は他の日本人の安全の確保に動きました。水路現場は私を除いて進藤さん、紺野さん、藤澤さんの三名、農業計画に山口さんの一名、あとはジャララバード市内に西野さん、神代さん、山中さんの三名。まず、ワーカー経験の最も短い藤澤さんに連絡し、詳しい事情は伝えず、とにかく近くにいる進藤さんと合流するように言いました。次に進藤さんへ連絡し、すべて事情を話し、すぐに新現場基地に避難するように、その時は数名の現地スタッフを同行させ、できるだけ人気のある道で来るようにと伝えました。紺野さんはマドラサの現場にいましたが、車が

ありませんでした。マドラサの現場は百名近くの作業員がいるので、比較的安全だと思いましたが、すぐに車を送るようになり手配しました。この間の連絡は傍受される危険性がより高い無線は極力使わず、携帯電話で、日本語だけで行うように心がけました。

次に農業計画でダラエ・ヌールのカライヤヒの圃場にいる山口さんに電話で連絡をしましたが、なかなか繋がりません。何度かけても繋がらなかったため、とりあえずカライヤヒに車を送り、運転手には圃場に着的たら、山口さんに電話をさせるように伝えました。

連絡を開始して、二十、三十分後に進藤さんと藤澤さんが新現場基地に到着。進藤さんに山口さんに電話が繋がらない旨を伝えると、山口さんと一緒に働いている農夫のモハマド・アジャンに電話をしてくれて、山口さんと連絡がとれるようになりました。山口さんには今は下手に動くよりはすぐ近くのダラエ・ヌール事務所に避難した方がいいと言つて、そうしてもらいました。

さらに数分後、紺野さんが到着。ジャララバード市内は最初から安全圏と考え、とりあえず確認の連絡だけを行いました。しばらく、新現場基地で待機していると、紺野さんがダラエ・ヌール居住の日本人のパスポートを確保した方がいい、と提案してきました。つま

り、この事件で日本人がドラエ・ヌールに行く機会がなくなるかもしれないから、重要なものは山口さんがドラエ・ヌール事務所にいるうちに確保しておいた方がいいということ。この時点でのドラエ・ヌール居住者は伊藤さん、山口さん、西野さん。西野さんは前日から所用でジャララバード滞在。山口さんには伊藤さんと西野さんの部屋に入り、少なくともパスポート、他に重要そうなものがあれば確保して移動に備えておくように伝えました。この時の連絡で山口さんの方から、ドラエ・ヌール診療所の古参のナースでブディアライ出身のサルフラーズさんが、自分の村で事件が起きて、いてもたってもいられない、診療所の仕事中心だが現場に行くのを許可してほしい、と言っていると言ってきました。私は許可できる立場ではなかったのですが、ことがことなので許可をしました。

募る焦燥感

その後、ジャララバード事務所のヌール・ザマーンから連絡が入り、Dr・ジアが事件現場に向かったこと、日本人はすぐにジャララバードに戻るようにとの指示を受けました。道中での不測の事態に備えて、PMSスタッフの長老格トラブダールさんと数名のスタッフに同行してもらい、ジャララバードに出発しました。

ジャララバードに着いてからは、大使館や中村先生と連絡を取り合いましたが、伊藤さんに関しては、現場に行ったDr・ジアの連絡をただ待つしかありませんでした。現場基地を出発するあたりから、時計を見なくなっていたので、何時にジャララバードに着いたかわかりませんが、ジャララバードに着いて一、二時間後くらいに伊藤さんのドライバーのモハマド・ジャンが解放されたとの報を聞ききました。それで少し期待が持てましたが、その後はずっと待つだけの長い時間でした。

数時間後、伊藤さんが解放されたとの連絡が入りました。安堵しましたが、すぐにDr・ジアと連絡をとっていたヌール・ザマーンに、ともかく伊藤さんと話したい、伊藤さんのところにスタッフを送って電話させるように言いました。ヌール・ザマーンはすぐにDr・ジアと捜索に出たブディアライ出身のスタッフたちに連絡をとってくれました。

しかし、数十分待ちましたが折り返しの連絡が来ません。もう我慢ならず、捜索に出たブディアライ出身のスタッフに手当たり次第に電話しました。ヤル・モハマドが十五分くらいで伊藤さんのところへ着くと言うので、十五分後に再び電話すると、もう少し待ってくれと言う。十分後、五分後と間隔を縮めて、何度も電話しました。結局、捕まった犯人の一人が解放したと言ったんだ、あいつが嘘を

言ったんだ、という言葉が聞いただけでした。その時にはすでに日が落ち、暗くなりかけていました。

この待つている間に、車をドラエ・ヌールへ数台送り、山口さんはジャララバードに移動しました。

無事を祈りながら過ごした夜

あたりが暗くなったころ、ヌール・ザマーンから日本人は宿舎に戻った方がいいと言われ、事務所には日本人はみんな宿舎に戻りました。宿舎に着くと、まずリビングに集まってもらい、これからのことを話しました。次の日は日本人は現場に出ない、事務所には自分、神代さん、山中さんの三名だけが出勤し、あとは宿舎で待機。伊藤さんが戻って来たとき、怪我をしているか、体調を崩している可能性があるのか、宿舎の薬品類の確認など準備をしてほしいと、医師の西野さんをお願いすると、もうすでに準備してあるとのことでした。

あとは特にするべきことがなく、それぞれ部屋に戻るなり、リビングに残るなりしましたが、みんながみんな眠れない夜を過ごしました。

次の日のことはあまりよく覚えていません。九時頃、伊藤さんが遺体で見つかったとの報を受けた時に泣き崩れたこと。そのあと、宿

舎で待機しているみんなに報せに言ったこと。伊藤さんの荷物をダラエ・ヌールから持つてくるようにアフガン人スタッフに指示したこと。知事公邸に運ばれた伊藤さんに対面したこと。届いた伊藤さんの荷物をまとめたこと。日本大使館から書記官の方が来られてもう一度伊藤さんの身元確認をしたこと。断片的な記憶があるだけで、細かいことは覚えていません。

夜になって宿舍の隣の国際赤十字の方々から吊問に来られたのを思い出しました。十人くらいいましたが、それぞれ国籍も宗教もばらばらでしたが、それぞれの祈り方で哀悼の意を表してくれました。

彼らが帰った後だったか来る前だったか、西野さんが線香を焚こうと言いました。西野さんはマラリア対策のため日本から持つてきている蚊取線香を使おうとしましたが、私が日本からお香を持つてきていたので、それを使うことにしました。茶碗にダラエ・ヌールでとれた米を炊いたごはんを盛り、箸をたて、香を焚きました。香は絶やさず焚くと決め、数名がリビングに寝具を持つてきました。伊藤さんの荷物の中にタバコがいくつあったので、喫うことにしました。十年ぶりくらいで喫いました。苦かったです。もうやめたとか言いながら時々喫ってる進藤さんも喫いました。学生時代に喫っていたという西野

さんも喫いました。まったく喫ったことのない、タバコの火のつけ方も知らない山口さんも喫いました。どこかで伊藤さんを感じていたかったのかもしれない。その夜はやはり眠れず、香を焚き続けていました。

次の日はあわただしく過ぎました。朝、中村先生がジャララバードに到着されて、すぐに事務所に行き、葬儀を執り行い、中村先生が伊藤さんと対面し、知事公邸でニングラハル州知事と会見。知事が手配してくださった国軍のヘリでケーブルへ移送。伊藤さんには中村先生と進藤さんが同行しました。息継ぐ暇もなくことが進んでいって、この日のことも細かいことはあまり覚えていません。

ただ夜にケーブルの中村先生から電話がありました。日本人は撤退することになるが、残務処理のために残ってほしいとのことでした。そうなるだろうことは予想していましたが、なにより自分の意志で残るつもりでした。ただ、家族の了解を得なければならぬと思い、中村先生からの電話の後すぐに、実家の両親に電話をしました。父は、本当はすぐにも帰ってきてほしいが、仕事があるなら仕方がない、と理解してくれました。

翌日は金曜日で休日でした。いつもの休日ならみんな部屋に引きこもって、自分の時間を過ごすのですが、その日はみんなリビングになんとなくいて、香を絶やさないようにし



ジャララバード事務所で。

PMS 副院長 ジア医師 (左から2人目)らと。左端が伊藤さん。

ていました。

次の日の土曜日からは現場への出勤はもちろんなし、私と神代さんと山中さん、事務の手伝いのため紺野さんが事務所に出勤し、残りの日本人は宿舍で待機としました。撤退が間近だから、現地スタッフへの引き継ぎの準備と身辺の整理をしておくようにと伝えていたので、待機組も宿舍で忙しくしていました。

「日本人はなんとでも守るから……」

九月二日まではこれといった撤退に関する連絡はなかったのですが、九月三日になって

急に日本人ワーカーは早急にアフガニスタンから出国するようにとの連絡が来ました。すぐに私以外、ワーカー六名分のチケットの手配などを行いました。現地スタッフへ引き継ぐべき仕事の量が多い会計や事務の神代さんと山中さんの引き継ぎ準備がほとんどできていませんでした。しかし、撤退は決定事項で覆せない、とりあえず引き継ぐことをまとめて紙に書いて渡してくれ、と言って帰る準備をさせました。

翌九月四日、十時に日本人ワーカー六人が発つのをジャララバード空港で見送って、宿舎に戻りました。その時点で宿舎にいる日本人は私一人。宿舎が広く静かに感じられました。宿舎の門衛のママ・ジャンが、俺たちがいるから安心しろ、と二度も三度も言っていました。

二日後、中村先生と進藤さんがジャララバードへ戻って来られました。その時に、進藤さんと私は九月二十三日にアフガン出国だと知らされました。正直、短いと思いました。私はアフガニスタンに着任後、二年半会計担当としてジャララバード事務所でも働きましたが、ここ二年間は水路現場にいたため、事務所の状態はほとんど把握していません。しかも、この三週間間の期間でやることは、アフガン人への引き継ぎで、九月一日から始まった断食月のため仕事の効率が下がることは目

に見えてました。

しかし、とにもかくにもこの期限内でやるしかないのです。次の日から神代さんと山中さんにまとめてもらった引き継ぎ内容の書いてある紙を片手に、仕事を始めました。

時間がなく、いらいらしながらの作業でしたから、ときにはアフガン人に指示する声が大きくなり、向こうも断食でいらいらしているなかで仕事をしているので、一触即発といった場面もありました。

進藤さんは農業計画の引き継ぎが終わると、これといってやるものがなかったのですが、雑務やら夕飯の準備やらでたいへん助けてもらいました。なにより精神的な面での支えが大きかったです。

期限の半ば過ぎたころ、ヌール・ザマーンに、帰らないでくれ、と言われました。ここで日本人が撤退すれば伊藤さんを殺した連中の思うつぼだ、日本人はなんとしてでも我々が守る、だから日本に帰らないでくれ、と言われました。私はなにも言えませんでした。

九月二十二日、ほとんど不十分なかたちで引き継ぎを終えました。何か問題が起きたら電話してくれ、と私の日本での携帯電話番号を教えました。あとは彼らが頑張ってくれるのを期待するしかありませんでした。

九月二十三日、アフガニスタンを出国。出国直前、スタッフたちから、また戻って来

るんだよな、と何度も言われました。私は、インシャッラー(神の思召しがあれば)としか答えようがありませんでした。

日本に帰国してから三週間、現地から電話が数回ありました。どれも、いつ戻って来るんだ、といった内容です。

▼寄附をしてくださる皆さまへ▼

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承くださいませ。う、お願いいたします。

▼郵送方法の変更について▼

*一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承ください。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

*ご寄付をお送り下さった郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼未使用の切手、ハガキを！▼

*会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。(使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい)

*一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

それぞれの良心を共有し、 現地活動の平穩を祈る

農業計画（試験農場）担当

進藤陽一郎

現場は一時混乱

九月六日、中村先生がジャララバードに戻られた時、アフガニスタン側に残っていた日本人ワーカーは松永さんただ一人となっており、ジア副院長やヌールザマンを始めとした現地職員達と活動を支えていました。元々この一年で現地職員中心での運営へ切り替えるという方針が決まっており、用水路建設、ダラエヌール診療所及び農業計画に関わる日本人ワーカーは現地職員への業務の引継ぎを行う段階に入っていた訳ですが、今回のワーカー達の帰国は非常に緊急だったため、私達は各所に残った混乱と戸惑いを除き、速やかに現地の業務を落ち着かせることが必要でした。中村先生と共に警備に伴われ現場へ行くと、用水路建設の長期的存在であるタラフダール爺が「わしに任せろ！ここにローダーを連れて来れば分水路の造成はすぐに終わらせて見せる！」と、こんな時だからこそと言わん

ばかりに元気に振る舞ってはいましたが、よく話を聞いてみると重機配置など全体の流れを度外視して、各現場監督同士が切れ切れになった働きをしている状況が見えてきました。また、そうした各現場間の作業調整を引き継いだベテランのパチャグルは「どうすればいい？これからは作業の管理だけでなく、安全面の監督もしなければいけない。マドラサの建設と水路の建設現場も距離が離れているし忙しすぎる」と、日常業務の上に安全面を守ることへの責任も一手に背負うことになった不安をにじませます。同様のことは用水路現場だけではなく、「この秋に播くはずの除虫菊やえん麦の畑準備はどうするのだ？堆肥を購入するお金はPMSから出るのか？」「ミスター伊藤が手がけていた涸れ川の護岸工事はどこまでで区切りをつけたらいいんだ？」と、農業、灌漑用井戸の掘削作業、暴れ涸れ川の護岸工事などの作業でも戸惑いが生じていました。

中村医師の強い決意

そんな状況の中、九月九日、PMS職員と現地住民総勢約八百人で行われた伊藤さんの追悼会。中村先生は「現地の人達に必要とされ、皆が共に働いてくれる限り、PMSは活動を決して止めない。早魘かんぱちを前に貧窮する人々のために働かなければならないのはむしろ今からだ。日本人ワーカー達は当面いなくなるが、私は皆と残って共に事業を達成する」と彼らの戸惑いを打ち消すように激励をされました。その固い約束は、他でもない中村先生の口から発せられると誰もが信頼を寄せるものです。またこれを機に現場・事務サイドと中村先生との直接の連絡会議が持たれることになり、重機作業と手作業との作業地の集中化、効率化も行われたことで現場作業はいち早く安定しました。農業計画については昨年度より普及段階に移行していた日本米・大豆やアルファルファ、えん麦といった作物の栽培・採種と普及の活動を全面的に現地の農家の人達に任せることとなり、最低限



ダラエヌールの試験農場で。進藤さん（左）、現地ファーマーのアキルシャー（右）とともに圃場を見守る伊藤さん

2009年カレンダー

「驢馬のいる所」
画・甲斐大策

予約受付開始します

A2判(画・7点) 定価:1500円(税、送料込み)



今年もカレンダーの予約が始まります。今回のテーマは「驢馬」。現地で貴重な労働力として、また移動民たちの旅の友として、さらに穢れのない無垢で純粋な魂の象徴として愛される驢馬の姿を描いています。画は会報表紙画をご提供いただいている甲斐大策さんです。同封のハガキでふるってご予約ください(ご友人、知人へのプレゼントも承ります)。

の管理で回るようになりました。

そうした業務の安定が図られる一方で、重く沈んだ内心を打ち明けてくれる職員もいます。「村の子供達は今もまだミスター・イトーがいなくなった事が分からなくて『イトーはいつ来るんだ』と口にしてている。それを聞くたびに我々は毎日悲しくなる」。これは伊藤さんとブディアライ農場でいつも一緒に働いてきたアキルシャの一言です。日本では「アフガン人は恩を仇で返した」と言う人もいます。彼のようにか。しかし私達が実際見知るものは、彼のように私達と悲しみを共有するアフ

ガン人の姿、または日本人が居ようと居まいと早魃が迫り続ける恐ろしい現実の光景、そして相も変わらず一所懸命に生きていかなければならない農民達の生活です。やり切れぬ失望感や怒りは確かにあります。しかし私達が共有できるものは一人一人の中にある良心であつてもいいはず。私はこれからも中村医師の活動に共感し、アフガニスタンの人達の側で支える仲間として皆様と一緒に力を与えたいと思います。今後も彼らの活動に力が与えられ、またこの会報を手にかされる皆様の心身の平穏が守られますように。

アリアナ大地の心
アリアナ魂

甲斐大策

12

生涯初めての英語、ギヴ・ミー・チュールインガムを口々に、占領軍兵士に手を差し出す子供達がいいた。六三年前、日本列島でのことだった。

五千年近く前、中央アジアに発したアリアナ民族の大移動は、千五百年程もかけ、印度から地中海域、東欧へ進出、定着を重ねる。さらに千年、人々の生きている形は各地で個々に定まり、この頃小アジア出身のギリシヤ人が、ベルシヤ帝国の版図内の地名を記録した。そこには、アリアナ人の故地を偲ばせる地名アリアナがある。今日のアフガニスタンとその周辺である。

アリアナとはサンスクリット語で、高貴な(魂)との意味をもつという。

バシュトゥンの一部族名を誇示する国名アフガニスタンと異なり、アリアナの響きは、全バシュトゥンから非バシュトゥンまで、国境・民族・宗教・宗派を超え人々の心の一部となっている。

昔烈な歴史の往来にも、この地からアリアナの名は消えなかった。大移動当初の心、アリアナ人の心が生きつづけたから、と思うしかない。一九六〇年代、アフガニスタンでは、都市、街道、村道、山中、どこにいてもその地をそれぞれのルールとイスラムの規範を守っている限り、理不盡な殺傷はおろか、物乞いに出ることはなかった。餓死者を出しつ、も掌を差し出しはしなかった。飢餓線上に堂々と立ち礼をつくす、その愚かにさえ見える心の掲り所は、気高いアリアナ魂ではない、と信じてきた。

この三十余年、無辜の人々を殺傷し大地を穢し、ヒンドークシンの万年雪を溶かし去るようになん人々の高貴な魂を蝕む力が、アリアナの地に在る。

敗戦直後、米兵に追いつがった子供達は、その十年後、社員食堂や学生食堂にいた。米の配給切符をそえて食券を買えば、米飯メニューが値引きされた。しかしその頃既に切符を提出する者は殆どいなくなった。飢餓は、我々から去りつつあった。その後五十年、去つたのは飢えだけではなかった。つき従う者達の先頭に立ち、生命を賭すような気高い心はもう残っていない。

●事務局便り

*伊藤和也君が亡くなって一ヶ月になろうとしている。さまざまな思いが去来するが、現地では九月九日にダラエヌールの農民と有力者たち約八〇〇人が集まり葬儀が行われ、九月三日には、伊藤君が働いていたブダイイ村の一角に中村医師自身が穴を掘り記念碑を建立した。記念碑は東(日本)に向けられ、参列者に対して中村医師が「イトウのなきがらは、両親の傍らに於いて中村医師がた達とここにいて、農場の行く末を見守っている」と述べた。十月二日には、静岡県掛川市の興禅寺で四十九日の法要が行われ、近親者の見守る中納骨が行われた。法要にはアフガスタン大使も参列された。

伊藤君の死は、私達の予測を越えて全国のさまざまな人々にメッセージを發し続けている。私達としても伊藤君の仕事や人柄を形にすることでそれに応えて行きたい。十一月には、静岡新聞・静岡放送主催で掛川市を皮切りに写真展が企画されている。会としては「伊藤和也追悼集」を来年早々に、「伊藤和也写真集」と「農業プロジェクト報告集」を来年一週忌までに出したいと考えている。

*アフガン現地では、九月末までに日本人ワーカーは全て引き揚げ、早魃の続くなか、中村医師が孤軍奮闘して現地スタッフを指揮している。外国軍による誤爆の民間犠牲者は減ることなく、反政府勢力のテロの巻き添えも増えている。治安の悪化は否めないが、世界中のNGOがまだ踏ん張っている。今年のNGO関係者の犠牲者は二十九人、

そのうち外国人は五人と発表された。そういう中で、日本政府は、インド洋での後方支援の延長を決めようとしている。現政権が、反政府勢力を軍事的に制圧するのは不可能と考え、水面下でタリバンとの妥協策を模索しているというのである。反テロ戦争「は何を生み出したのか?」かつて「アフガン復興支援会議」を東京で主催した日本政府がやるべきは、対米従属の軍事支援ではなく、両者をテールにつけるべき外交努力ではないのか。そして、何よりも戦乱と早魃で疲弊した農業国アフガンの農業復興支援ではないのか。それをテロ対策の本道だと思ふ。

◎村から

伊藤さんの事件は、私達事務局員にとりましても大きな試練でありました。現在の事務局ボランティアは数名の男性と、伊藤さんのお母様と同年輩、又少し年上の三十人ほどの女性で構成されています。子を持つ母親の気持ちほど痛いほど解る私たちは伊藤さんの訃報を耳にしてからの数十日、折にふれ涙しない日はありません。沢山の方々から寄せられる弔意と励ましのお言葉、その方々のお心遣いをご遺族に伝えるべく事務作業しながら今までになく多くの事に考えをめぐらす毎日です。会にとってかけがえのない存在であった伊藤さんの足跡を大切に思い、将来どのように残していくかを考えながら、また伊藤さんのご遺志である現地活動の継続を支えるためにも事務局はこれからも小さな力を合わせ一歩ずつ歩んで行くつもりです。(N)

会 則

①本会の名称をペシャワール会とする。
②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。
④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。

⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。

⑨本会の事務局をFARAHOUSE(〒八一〇〇〇四一 福岡市中央区大名一丁目一〇―二五 上村第二ビル六〇三号)に〇九二―七三一一―三三二七に置く。

医者、中村哲
用水路を拓く

[3刷出来] 1890円
アフガンの大地から
世界の虚構に挑む

●養老孟司氏絶賛 用水路建設事業の7年をつづった感動の記録

丸腰のボランティア
すべて現場から学んだ

中村哲編 [2刷] 1890円

空爆と「復興」

[2刷] 1890円

辺境で診る
辺境から見る

[3刷] 1890円

ダラエヌールへの道

[3刷] 2100円

医者 井戸を掘る

[10刷] 1890円

医は国境を越えて

[6刷] 2100円

ペシャワールにて

[8刷] 1890円

聖愚者 甲斐大策
の物語

1890円

福岡市中央区渡辺通2-3-24
石風社 電話092(714)4838

アフガニスタンの
診療所から

609円
筑摩書房 東京都台東区蔵前2-6-4
電話03(5687)2670

価格はすべて税込価格(税5%)です